

涙と共に種を蒔く人
詩編 126 編 5-6 節
ルカによる福音書 8 章 4-5 節

2018 年 9 月 18 日
学院長 嶋田 順好

この日、御前に共々に集い、宮城学院の創立 132 周年を覚えて記念礼拝を持つことが許されますことを心より主に感謝せずにはられません。

今年は、宮城学院を創立したウィリアム・E・ホーイ宣教師の母校ランカスター神学校からキャロル・リッチ校長夫妻が来仙され、7 月 18 日に宮城学院を訪問してくださいました。東北学院大学ブランディング事業「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業」の一環として学院大学が御夫妻を招聘し、出村彰名誉理事、鐺木道剛教授の仲介により、姉妹校である宮城学院にもわざわざご夫妻が足を運んでくださることになったのです。

折角の機会ということで、リッチ先生には大学礼拝で学生たちに説教をしていただきました。先生は先ほどお読みいただいたルカによる福音書 8 章 4 節～15 節の「種蒔きの譬え」を取り上げ、「道端」「石地」「茨」「良い土地」と場所を選ぶことなく農夫がひたすら種を蒔き続けた不思議さについて触れます。そのことを通して、徒労をいとわず神の言葉が、いつでもどこでもすべての人に宣べ伝えられることの重要性を伝えてくださいました。その蒔かれた種を自らが豊かに宿らす良い土地となり、今度は種蒔く者となって宮城学院へと遣わされたホーイ先生、プールボー先生、オールド先生を始めとする多くの宣教師たちの働きを思い起こさずにはられない説教でした。

歓迎昼食会の席上で、リッチ先生はランカスター神学校のサンティー・チャペルにあるミッションナリー・ステンドグラスと呼ばれているステンドグラスのレプリカを寄贈してくださいました。リッチ先生によれば、礼拝堂のステンドグラスはその共同体のコア・アイデンティティを物語る重要な役割を担っているということですが、そこには「種まき」、「収穫」、「サマリアの女」、「世の光キリスト」の姿が描かれていました。いずれも宣教師の使命を明瞭に告げる聖書的主題です。しかも驚くべきことにそのステンドグラスの一番下のところには、ひっそりと日本を象徴する富士山と神社の鳥居が描かれてあったのです。

この一事からもランカスター神学校とその学校を生み出したジャーマン・リフォームド・チャーチが、「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい」（マタイ 28:19）との主イエスの御言葉をどれほど真剣に受けとめ、「地の果て」（使徒言行録 1 章 8 節）までもその使命を全うしようとしたかがよく理解できます。それこそがランカスター神学校のコア・アイデンティティであり、しかもその「地の果て」とはほかならぬ日本であったのです。このことは統計的事実からも明らかとなります。

ジャーマン・リフォームド・チャーチは、信徒数 20 万人足らずの小さな教派でした。二度の教派合同により現在は The United Church of Christ in U.S.A. となっているにもかかわらず、不幸な戦争の時代を除くと 1970 年代の前半まで、ほぼ一貫して毎年 10 名以上、多い時には 18 名もの宣教師を派遣して宮城学院を支えてくださったのです。これは真に驚嘆すべきことです。

宮城学院より1年遅れて、昨年、札幌にある長老派系のミッションスクール北星学園は、創立130周年を迎えました。この北星学園の場合にはこれまで総計59名の宣教師、外国人教師がミッション・ボードから派遣されてきています。ほぼ同じ期間、宮城学院には160名もの宣教師が派遣されてきているのです。この事実一つをとってみてもジャーマン・リフォームド・チャーチを核とする特別な祈りと愛が、どれほど集中的に宮城学院に対して捧げられ、覚えられていたかがよく理解できるのではないのでしょうか。

宮城学院の「建学の精神」は観念でも、思想でも、教えでもありません。アブラハムが生まれ故郷、父の家を離れ、約束の地に旅立ったように、日本へ、仙台へ、宮城学院へ遣わされた多くの宣教師たちの「神を畏れ、隣人を愛する」献身の事実が裏打ちされているのです。ですから宮城学院は神によって遣わされたホーイ宣教師、プールボー宣教師、オールト宣教師をはじめとする多くの宣教師とその背後にいた名も知られぬ多くの信徒たちの愛と祈りを忘却し風化させることなく、この時代のただなかで種を蒔き続ける働きを全うしていかなければなりません。リッチ先生の来訪は、わたしたちに今一度、宮城学院の出自と来し方をまざまざと思い起こさせてくださる恵みの出来事となりました。

ところでさきほども触れましたが北星学園は創立130周年を記念し、『サラ・スミスと女性宣教師—北星学園を築いた人々』という意義深い本を刊行されました。その本を繙きながら北星の創立者スミスの歩みをたどるとき、常に私の念頭を離れなかったのは宮城学院の初代校長となったプールボー先生のことでした。

19世紀中葉のジャーマン・リフォームド・チャーチは、聖公会、長老派、オランダ改革派、組合派、メソジスト派等に比べると日本への宣教師派遣が20年から30年前後出遅れました。同教派から最初に日本へ派遣された女性宣教師のプールボー先生とオールト先生が、横浜港に降り立ったのは、1886（明治19）年7月2日のことでした。その地に10日間ほど滞在している間に、先生方はフェリスを始めとする先発のミッションスクールを視察します。その結果、横浜、東京地域には、もはや自分たちの分け入る余地はないとの見立てをするのです。その折ホーイ宣教師から仙台に新設する女学校の校長に就任するよう要請を受け、先生は迷うことなくそれに応え、仙台に至ったのは7月16日のことでした。すでに開学準備が進められていて、校主を押川方義牧師とする宮城女学校は、9月18日に創立記念式典を実施し、9月24日から10名の生徒をもって授業を開始しています。

電光石火の早業とも言えますが、日本に到着して78日目、つまり3ヶ月もたたないなか、言葉はもちろんのこと、日本の文化や風習にまるで習熟していないプールボー先生が、伊達政宗を祖とする歴史と伝統を誇る城下町仙台でミッションスクールの校長となったのです。人間的には不可能と思われるような使命を担うことになりました。事実、先生は心身ともに困憊し、最初の4名の卒業生を送り出した6年半後には志半ばで帰国を余儀なくさせられています。

スミスの場合はどうでしょう。彼女は1880（明治13）年9月に横浜港に降り立ち、その後マリア・ツルー校長のもと、後に女子学院となる築地の新栄女学校の教師となり、3年目には校長に就任しています。しかし健康上の理由からその年のうちに退任し、療養も兼ねて夏には居留地のあった函館に移り住むのです。その地にはこれまた後に女子学院と

なった桜井女学校の創立者にして校長であった桜井ちかが、夫と共に日本基督一致教会函館教会建設のために勤んでおり、スミスもその伝道活動を助けることになりました。

スミスが函館に移住して3年後の1886(明治19)年に北海道庁が札幌に設置されることとなりました。道都となった札幌に北海道尋常師範学校が開設されたことを契機に、スミスはその学校の英語教師となることで、札幌にミッションスクールを開設する橋頭堡を築きます。そして1887年1月6日、彼女は7人の生徒を伴い函館を出立し、小樽経由で札幌に至り1月15日には私塾として女学校を開設したのです。

つまり、スミスは札幌で女学校を始める前に、東京で3年間、函館で3年半を過ごし、言語を習得し、女学校開設のために必要にして十分な教育経験を与えられるのみならず、マリア・ツルーを始めとする有能な先輩女性宣教師、桜井ちか、矢島楫子をはじめとする聡明な日本人女性キリスト者たちとの広くて深い人格的な交わりを築きます。しかも、道庁が設置されたとはいえ、当時の札幌は人口15,000名ほどの開拓村にすぎません。ほとんどの住民は移住者で、伝統や文化的しがらみもありません。さらに札幌農学校には優れたキリスト者の外国人教師が集い、札幌農学校初代教頭ウィリアム・スミス・クラーク博士の圧倒的感化を受けた1期生と、その1期生から強引とも言える伝道をされた2期生は、ほぼ全員が熱心なキリスト者となっていました。つまり、日本のなかのアメリカともいうべき、日本のどこよりも西欧キリスト教文化への理解がみなぎっている土地だったのです。ことに札幌農学校一期生で温厚篤実な教育者として知られる大島正健(甲府一高校長時代に石橋湛山に深甚な人格的感化を与えた)が北星女学校の校主となり、同じく2期生の宮部金吾、新渡戸稲造たちも教壇に立って物心両面から支えたことはスミスの大きな力となりました。

いずれにしても雌伏すること6年半、その期間が本人の思いを越えたよき訓練と備えの時となり、スミスは満を持して札幌に女学校を開設することができたのです。まさに万事が益となって働き、白いキャンバスに自分の願っている絵を存分に描く条件が備えられていたと言えるでしょう。そこにプールボー先生が直面した現実との大きな違いがありました。

スミスに比べればプールボー先生の場合は、文字通りゼロからの出発ともいえる状況にありました。

言うまでもなくプールボー先生は、日本語を系統的に学ぶ機会を与えられず、生徒たちと十分に意思疎通する術を持たないなかで開学を迎え、東北地方最初の女性校長に就任したのです。しかも伊達政宗を祖とする仙台藩は、表高62万石、内高百万石を超える薩摩、加賀と並ぶ雄藩で、城下町仙台には、その歴史と文化と伝統が脈打っていました。更に時代的には切支丹禁制の高札が降りてからほんの13年しかたっていないなかのことでした。そこに仙台史上初めて弱冠31歳の西欧人独身女性が住みついて学校を運営するのです。そのことが、どれほど大きな十字架を負うことになるかということは想像するにあまりあります。もちろん、日本人のキリスト者たちの支援と協力を得られたこともあるでしょう。しかしながら率直に言って創立者の押川方義牧師は、強烈な個性の持ち主でした。言い換えれば協働して仕事をする相手としては、なかなか難しい相手であったに違いないのです。

どうでしょうか。思想的には開明的なことを説きつつも、実際には頑迷固陋な生活態度を取ることは人間にはよくあることです。民主主義や男女平等を説きながら、家庭では亭

主関白で通すという類です。まして儒教的な五倫五常で秩序立てられた封建的武家社会のなかで育まれた元武士が、キリスト者とされたからと言って、そのことをもって伝統的な日本文化の中で育まれた礼節感覚、生活習慣、立ち居振る舞いを、根底から変えるということは容易なことではありません。そのことは押川先生の場合にも当てはまるようにも思えるのです。しかも、押川牧師はプールボー先生よりも5歳年上だったのです。

島崎藤村が、『櫻の實の熟する時』という自伝的小説を書いています。そこには明治学院の学生であった時に開催された YMCA の夏期学校の様子が描かれ、当時のキリスト教会の代表的指導者たちの人となり、名は伏されたまま記されます。フルベッキ、植村正久、海老名弾正、小崎弘道、本多庸一、徳富蘇峰と思しき人々と共に、押川先生のごことが次のように描かれています。

「今度の夏期学校の校長で、東北にその人ありと言われ、見るからに慷慨激越な氣象を示したある學院の院長が通った。」

若き藤村の目には押川先生が「慷慨激越な氣象を示す」人物と映ったのです。一瞥したにすぎなかったのですが、文学者特有の鋭い直感が、的確に押川先生の人となりを描き出していると言えるのではないのでしょうか。

『E・R・プールボー書簡集』を読むとプールボー先生が、押川先生から学校の経営権を日本人に渡すようにという要求をことあるごとに受け続けたことがわかります。しかし、その要求に関し、プールボー先生は一步も引きさがることなく、妥協することはありませんでした。そのことをどう評価するかということは、簡単なことではありません。なぜなら日本の教会やキリスト教学校がミッション・ボードから自給独立するということにも、大きな意味があるからです。したがって押川先生のこの時の要求を無謀な要求と簡単に決めつけることはできません。丁寧な歴史的研究に委ねなければならない問題と言えるでしょう。

しかし、この問題を仙台的文脈で思いめぐらす時に、私たちは東華学校のことを心にとめておかなければなりません。東華学校は、宮城女学校、仙台神学校が創立されたのと同じ年に、新島襄が、ジョン・K・デフォレスト宣教師の協力のもと、仙台宮城の政官財を代表する人々の支援を得て創立した男子のミッションスクールです。当初はキリスト教教育を色濃く織り込んだカリキュラムを展開していましたが、次第にその色が薄められ、キリスト者でない理事たちが、1891年に聖書科の授業を廃止させます。それに反対した宣教師たちが退職、翌年の春には廃校に至るのです。

もちろん、歴史に「もし」はありません。しかし、創立間もない宮城女学校の運営が、日本人キリスト者の手に委ねられた場合、大日本帝国憲法、教育勅語、さらにはキリスト教学校での宗教教育を禁じる文部省訓令第12号へと至る大きな時代の流れに翻弄されて、キリスト教学校としての基盤は揺らぎ、校舎全焼などの災禍による財政負担にも耐えられず、早晩、宮城女学校の存続それ自体が困難な状況に立ち至ったことは十分に考えられることでした。

ですからプールボー先生が、この時、どんなに厳しい試練に直面しても、ぶれることなく、ゆらぐことなく、信仰に堅く立って宮城女学校を導いてくださったことは本当に幸いなことでした。先生のお写真を見るにつけ、先生は美しい女性だと思わされます。一点を

見つめる強い眼差し、すっきりとした鼻梁、きりりと結ばれた唇から、人間的には到底手に負えないと思われる使命 (Mission Impossible) に、神を畏れる信仰と隣人愛をもって果敢に挑戦し続けた女性のみが湛えることのできる清冽にして凜とした美しさが伝わってくるのを感じさせられます。

プールボー先生は、農夫が「道端」「石地」「茨」「良い土地」と場所を選ぶことなくひたすら種を蒔き続けたように宮城女学校で福音の種を蒔き続けました。その種を蒔く先生の姿は、自ずと詩編 126 編 5-6 節のみ言葉にも重なってきます。

涙と共に種を蒔く人は
喜びの歌と共に刈り入れる。
種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は、
束ねた歩を背負い、
喜びの歌を歌いながら帰ってくる。

それはまさに創立 7 年目にして最初の 4 人の卒業生を送り出し、自らも宮城女学校を離れる決断をした時の先生の思いそのものであったに違いありません。

ですから、この日、勤続 20 年、30 年の表彰を受けられる方々はもちろんのこと、宮城学院に連なる私たちは、この時代のただなかで「神を畏れ、隣人を愛する」とのスクール・モットーに堅く立ち、プールボー先生にならって涙と共に種を蒔く労を厭うことなく、喜びの歌と共に刈り入れる希望に歩む者でありたいと願います。

祈祷

恵みと慈しみに富み給う主イエス・キリストの父なる御神

あなたの御名をあげます。この日、宮城学院に連なる者たちが、創立 132 周年を記念する礼拝を持つことを許され心より感謝申し上げます。プールボー先生が試練を貫いて宮城学院を導き支えてくださったことを心に刻むことができました。

私たちも十重二十重に押し寄せる時代の荒波にたじろぐことなく、「神を畏れ、隣人を愛する」者を育む教育研究共同体として、「涙と共に種を蒔き、喜びの歌と共に刈り入れる」希望に歩む者とならせてください。

なにより勤続 20 周年、30 周年の表彰を受ける教職員皆様の上に、あなたから祝福とねぎらいが豊かに注がれ、ますます宮城学院のためになくてはならない貴い働きを全うしていくことを得させてください。

こののち持たれる創立記念講演をしてくださる増島俊之先生の唇をあなたの御霊が開き、私たち一人一人が心砕かれてその講演に真摯に聴き入ることができるようになりますように。

この祈りを宮城学院のまことの創立者であられる主イエス・キリストの御名を通してみ前におささげいたします。アーメン